

平成 30 年度第 1 回神奈川県総合教育会議議事録

名 称：平成 30 年度第 1 回神奈川県総合教育会議
開 催 日 時：平成 30 年 5 月 29 日（火曜日） 午前 10 時 25 分から 11 時 25 分まで
開 催 場 所：県庁 新庁舎 5 階 第 5 会議室
出 席 者：黒岩祐治知事、桐谷次郎教育委員会教育長、高橋勝教育委員会委員、倉橋泰教育委員会委員、河野真理子教育委員会委員、吉田勝明教育委員会委員、笠原陽子教育委員会委員

次回開催予定日：秋頃予定

問 合 せ 先：所属、担当者名 政策局政策部総合政策課政策調整グループ 村上、内海
電話番号 (045)210-3056（直通）
ファックス番号 (045)210-8819

経過：

1 開会

中谷政策部長：それでは開会にあたりまして、本会議を主催いたします黒岩知事からご挨拶を申し上げます。

黒岩知事：おはようございます。大変お忙しい中お集まりいただきまして誠にありがとうございます。昨年度の総合教育会議では、人生 100 歳時代における学校のあり方のほか、地域とともにある学校づくりに向けた取組みについて議論を行いまして、委員の皆様から様々なご意見をいただきました。

この意見交換を通じまして、地域に支えられ、地域に貢献する学校づくり、これがこれからの学校のあり方を考える上で、非常に重要な要素であるということを感じた次第でありました。またコミュニティ・スクールに関する事例によりまして、こうした取組みが教育現場において非常に前向きに行われている様子を伺いまして心強く感じたところであります。

本日は、持続可能な開発目標、SDGs や、教育分野における持続可能な開発のための教育、ESD の視点から、共生社会の実現に向けたともに学ぶ教育環境づくりについて議論させていただきたいと思っております。共生社会の実現というのは本県にとりまして喫緊の課題であり、ともに生きる社会かながわ憲章のもと、現在の取組みを進めているところであります。委員の皆様から忌憚のないご意見をお聞かせ願いたいと思っておりますのでどうぞよろしくお願いいたします。

2 議事

報告 かながわ教育大綱における主な取組みについて

中谷政策部長：ここからの議事進行は、知事をお願いいたします。

黒岩知事：それでは議題に入る前に、「かながわ教育大綱における主な取組み」について、事務局から報告させます。

○池田総合政策課長より資料1及び資料2について説明。また、資料2の説明の際に、神奈川県立住吉高等学校のダンス練習風景をスクリーンに上映。

黒岩知事：今の映像少しわからなかったと思います。もう一回見せてください。要するに、練習している時にですね、白い服の女子生徒ですね、あれは県立住吉高等学校の生徒さん。この男子生徒2人が県立中原養護学校分教室の生徒さんですね。で、何かこう、楽しくなっちゃって急にコラボレーションで激しくダンスし始めたという、こういうことなんです。これまで同じ学校の中にも、県立住吉高等学校の生徒さんたちと県立中原養護学校分教室の生徒さんたちが接することがあまりなかったというんですけれども、たまたま、このダンスを通じて、一緒になって踊って、その楽しさで何か一気に壁が溶けたと、そんな感じがあったということです。本番の舞台では、基本的に1つの曲の中で、形が決まっている振りの部分は一部なんです。それ以外のところは、自由に皆さん振付してくださいということで、順位はつけないのですが、ダンスコンテストみたいなものをやったんです。そうした時に、県立住吉高等学校のダンス部の生徒さんたちが舞台に出たんですけれども、その女子生徒が、キャプテンなんですけれども、県立中原養護学校分教室の生徒さんたちに、あなた達も出ないって声をかけたんですね。そしたら、それがきっかけとなって、その県立中原養護学校分教室の生徒さんたちが次のステージで踊るとい、そういうことになりました。それで、今の2人の男子生徒のダンスを見てもわかるとおり、非常に激しいダンス、結構パワフルなダンスでね。それを会場でやって非常に受けたということがあって、その県立中原養護学校分教室の生徒さんたちもすごく興奮したということがあって、終わった後、両方とも私の所に来てくれて、男子生徒2人がその女子生徒に、こういうきっかけ作ってくれてありがとう、って、そういう物語ですね。そこまでいけるとなんだか模範のようですが。

それでは、これからご意見あったら伺いますけど、教育長から、参考資料1について説明を行います。

議題1 共生社会の実現に向けたともに学ぶ教育環境づくり

桐谷教育長：参考資料1で、議題に関係します、インクルーシブ教育の県立高校のパイロット校の状況を少しご報告させていただきます。一つ、成果としましては、知的障がいのある生徒が高校教育を受ける機会の拡大に繋がったこと。県立高校改革の一つとして取り組みをスタートしまして、平成29年4月に県立茅ヶ崎高等学校8名、県立厚木西高等学校が15名。県立足柄高等学校が8名と、31名のお子さんが入学をしました。今年の4月の入学者は、3校合わせまして41名を受け入れております。

実際に生徒さんの様子がどうかということで、各校でアンケートとか、作文をいろいろとっております。連携募集で入学した生徒からは、インクルーシブ教育に対して学校全体で考えているので、生活がしやすい。勉強は難しいけれども、高校生活は楽しい。一期生の自分たちが頑張れば、インクルーシブ教育の未来を作っていくことができるかもしれない。こういった声をいただいています。また、連携募集で入学した生徒の保護者の方の保護者会がございます。大人数で馴染めるか心配だったけれど、いい子が多く、たくさん友達もできたと。これまで使おうとしなかった漢字を使おうとしていると、親としては、

もう満足している。

一方で、一般募集で入学をした生徒さんの声です。これを県立茅ヶ崎高等学校と県立厚木西高等学校で、講演会後の感想ということでもらいました。人はみんな違って、障がい者も違うところが大きいけれども、それも個性、様々な生徒が互いに認め合って協力していくことはよいこと。互いを認めていかなければいけない。いろいろな個性を尊重することでいじめを予防することにもつながる。県立茅ヶ崎高等学校を筆頭に、市内県内全国へとインクルーシブ教育の幅が広がると良いと思う。下にアンケートでインクルーシブ教育の考え方って知っていますかと、これを1年生に聞いたんですね。みんなの教室、モデル地域、これは茅ヶ崎市と寒川町を指定していますが、そこから来た生徒は、インクルーシブ教育という考えを高校1年、入った時に知っていたんですね。ところが、今は、学区がございませんから、それ以外の地域から来た子は知っているというのが42.8%。大体2分の1と、そういう状況があります。いかに早い段階、小中の段階からインクルーシブ教育をみんなと一緒にということが必要と考えております。

後ろは参考ですが、こういった県立高等学校での取組みの視察は、29年度1年間に3校で34回の視察がございました。これは県内の学校ですとか、他の都道府県の教育委員会です。県立学校も北海道から沖縄までの高校から視察に来られています。あとは国と文部科学省では大学関係の方からも視察がありました。こういった子ども達の評価とか、得るためにどういう仕組みでやってきたのかっていうのが、これまでの取組みです。入学前は連携募集ですから中学校に協力いただいて、事前登校をやっていました。また環境整備としては、少人数での学習などができるように、リソースルームという一つの教室を半分に区切った教室も整備をしています。それから、指導体制も複数の担任による指導支援や、ICTの活用、チームティーチングによる学習、それからリソースルームの活用、生徒一人ひとりに個別の教育計画を作成しています。学習評価も、達成状況を重視する個人内評価ということをやったり、キャリア教育も早い段階から、地域の企業等のご協力いただいて、職場見学等も実施をしております。県立厚木西高等学校は日産自動車さんからかなりご協力いただいております。今後の取組みですが、県立足柄高等学校においては、これまで足柄上郡だけでしたけど、31年度の入学者選抜から足柄下郡へ拡大をします。そして、今年の秋に策定する県立高校改革のⅡ期計画では、県内すべての地域で、概ね通学1時間以内で通えるように、インクルーシブ教育実践推進校を追加で指定をしていきます。それからやはり大事なのは、先ほどお話ししていましたように、小中学校の取組みをいかに拡大していくかということで、そのための非常勤教員の配置ですとか、環境整備、この辺も考えていきたいというふうに考えております。ということでご報告をさせていただきました。よろしく願いいたします。

黒岩知事：笠原委員いかがでしょうか。

笠原委員：私は神奈川の支援教育というところに、どうしてもベースを置いて考えたいなと思っています。そもそも1984年の神奈川県総合福祉計画の推進というところから、統合教育という考え方が出て、それが神奈川の、共に学び共に育つということに繋がって来ています。2002年に神奈川の支援教育のあり方の最終報告の中で述べられていた一文な

んですけれども、障がい児教育の延長線上ではなく、障がい児教育であるとか、通常の教育であるとかという区分とは離れて、様々な課題を抱える子ども達に対してしっかりと目を向けて、大人や社会がどうやったら、その問題の解決を図れるかということについて、しっかりと考え、取り組んでいく必要があるという辺りのところを気にしながら、自分自身の教員生活を送ってきている経緯があります。その中で通常の小中学校で学んでいると、当たり前なんですけども、様々な子ども達がいる、そういう様々な子ども達の状況をしっかりと受けとめている。障がいがあるお子さんは多分、将来にわたってその障がい、無くなっていくことはないだろうし、でも、そのお子さんが、その一生の中でどういう充実した教育を経験できるかはとても大きなことに繋がっていくのではないかと思います。学校にいと、先ほども言いましたように様々な子どもがいて、ぶつかり合いだとか、我慢をするとか譲り合うとかっていう経験の中で、子ども達の持っている、もともとのストライクゾーンがどんどんどんどん広がって行って、今まで自分で気づけなかった、自分の感性みたいなものが、そういう経験に応じて養われる。そして先生もそれによって変わって行って、工夫だとか、改善をしながら、学校教育に取り組んでいきます。まさにインクルーシブ教育というのは、外から何かこう、与えられて変えていくというよりは、地域の中にある学校の、そこに暮らす子どもや先生や保護者の方々と一緒になって作り上げていく、ものすごく創造的な、開発的な取組みなんだということを感じていました。ただ、そういう取組みだけで、インクルーシブ教育が進んでいくわけではなく、今、教育長のご説明にあったように、まさに今までそういう多様な子ども達の多様性に対応できる教育のシステムみたいなものが十分ではなかった。そこで、今回の県立高校改革の中で、インクルーシブ教育がしっかりと示されて、一つのロードマップが明示をされた。そして具体的に地域だとか、様々な機関とどうやって連携をしていったら、それが進んでいくのかということが明らかになったことがものすごく大きいことを実感しています。それは先ほどの県立茅ヶ崎高等学校のアンケートの中でも、勉強は難しいけれど、それでも高校生活は楽しいという生徒の声がありました。すべて子ども達は友達と一緒に生活したいという思いを持って暮らしているということを改めて実感しています。それが1つです。それから、県が出したこの神奈川のインクルーシブ教育の推進というリーフレット、知事も大変褒めていただいたって事務局から聞いているんですが、ここに示されている内容というのは、冒頭で知事がおっしゃっていたSDGsのゴール4で示されている考え方が入っています。SDGsのゴール4の教育の方針の中で、すべての人に包括的かつ公正な質の高い教育というこの理念が、この一つ一つのアンケートの中に入っていて、やはり神奈川は一步先を行きながら開発しているという実感があります。しかし、情熱や思いだけでは、できないところに、制度としてシステムとしてどう切り込んで行くかというあたりが、ようやく進んできたのかなという実感です。

吉田委員：僕は教育委員として、一つは文化芸術スポーツ、そしてもう一つとして、インクルーシブ教育っていうのを、ある意味での教育委員を離れたとしても、自分のライフワークとして、考えていこうっていうふうに思っているところです。というのは、地元の養護学校三つ四つの学校医あるいは産業医を勤めているんですけれども、年に2回、3回と、親御さんたちのカウンセリング相談に行き、接することがあります。本当に親御さんが非常

に悩んでいる。それは何に悩むかという、やはり、通常の他の子ども達と区別してそれで社会に出てどれだけ偏見を持たれているかというようなことを非常に悩んでいらっしやる。今までにも発言したと思うんですけど、カナダ、アメリカなんかでは、本当に 30 人、40 人くらいの少数のクラスで、そういった障がいのある子どももその中にいます。担任がいて、その障がいのある子どもの担当者が 1 人いる。アシスタントなんです。それで、ある時日本から留学してその学校に入った。そうすると、初めて入ったんで、日本人のその子どもは普通に座っていると、急に立ち上がって歩き回り出したり、あるいは奇声を発するような子どもがいて、それでびっくりして、何だ何だって騒いだ。そうすると、先生がそこで大丈夫だよと注意するのではなくて、友達が、大丈夫なんだよ、心配ないんだよ、と同級生たちがそうやって言ってくれる。それが僕一番大事なんだと。先生、そして大人がやるんじゃないで、そういう目線で子ども達が安心なんだ、というふうにやってくれる。だからこそ先ほどから高校ぐらいはもちろんありがたいんですけど、小学校中学校からそういうふうな形で教育して下さる。そういう教室で同じように生活してくれるってことで非常にありがたい。それまでは養護学校・特別支援学校全部分けて、そして 18 歳を超えたらバリアフリーだなんて、誰もなじまないっていうふうなことを感じる次第です。というのは、教育、そういったカウンセリングの中で、どうしても、電車に乗るんです。子どもが電車に乗って声を上げたり、ちょっと歩きまわったりする。そうすると、周りの大人たちは冷たい目で見て、ちゃんと子どもの面倒ぐらい見てるよな、ちゃんとじっと大人しく座らせろよな、そんなような発言が、あちこちから聞こえてくる。そうすると、母親としては自分の子どもを守るためには一生懸命それに対して、壁を作らなきゃいけない。そうすることが周りから言うと、モンスターペアレンツだと何かいろいろな表現をされてしまって、どうもかえってそこで障がいが起こってきて、さらに生きにくくなる時代っていうふうになっていく。それが小学校の時から、心配ないんだよ、安心なんだよっていうようなことで考えていくと、もちろん普通の学校にあると勉強大変でしょう、厳しいでしょう。それも大変なんだろうけど、僕はそこで周りの子ども達が安心した、友達、友情が生まれることによって、この社会は安心した、ゆっくりした気持ちで生きられるんだっていうと、子ども達の表情も柔らかくなって、非常にありがたい。親御さんがそういった多動の子どもであったり、障がいのある子ども達なんかをずっと 24 時間見るというのも本当に大変な、いっぱいいっぱいになってしまうことがある。最近では認知症のお年寄りだって、24 時間介護ではなくて、時々介護に疲れたらショートステイなんかを利用して少しリフレッシュしましょうっていう思いがある。同じようにそういった子ども達の親御さんだって少し休んでもらえる、そういった安心してもらえるような時間、そういった方向まで僕は進んでいってくれば一番ありがたいんじゃないかなっていうようなことを思っています。共通して、ああいう子ども達っていうのは、ピュアなんです。今の県立住吉高等学校のところで、一緒に踊ろうって言った時に、一緒になってダンスするなんて、なんて純粋な。本当に気持ちのいい、だから、いろいろな形で、友達ができて、そういう環境になってくれば、それは素直に子ども達の生活様式にもあらわれてくる。これが、一番ありがたい、そういったような結果にも繋がるんじゃないかなっていうふうに思って、是非、サポートしていきたいとのことを日々考えています。以上です。

倉橋委員：本当に、教育委員会の皆さんは素晴らしいというふうに思っているんですね。ただ悩ましいのが、援助って言えばいいのかな、要するに助けが必要な人たちがすごく増えていて、看護師さんを何人か配置する。どんどんコストが上がっていきんですけど。僕は経済人なので、見てて悩ましいところなんですけれど。いろいろなやり方があるんで、ITをもっと使うべきなんじゃないかな。衝撃的だったのがこれ。コピー持ってきたんですが、日経新聞の今年の5月10日のニュースなんですけど、「OriHime」というロボット、20センチぐらいのロボットが学校へ出て行っているんですよ、代わりに。スマホで遠隔操作して、カメラがついてるから、黒板も見えるんですね。先生が動いたらそれも追いかけてくれるし。ここで「ハイ」って手を挙げて発言することもできる。これだとですね、病院にいなきゃいけないような生徒さんが、そういう形に参加できるんですよ。それは、医師と看護師さんがそっちに行ってそこからやるという方法もあるじゃないですか。だから、そういうことも含めて様々な技術が発達しているんで、考えていかなきゃいけないんじゃないかなと思います。もう一つこれ持ってきたんですけど。これ日経トレンディの5月16日のネットニュースなんですけど、スタディサプリが急成長してるというニュースなんです。僕はリクルートの回し者じゃないですよ。実際にこれ、スマホでですね、先生の授業を見るというやつで、テレビで今宣伝してるんで皆さんご存知だと思うんですけど、現在1万本以上の動画がもう出来て、小学校4年生から大学受験生までのものが、月980円で見れるというやつですね。いいなと思って見たらですね、もう実際全国にある5000校ある高校のうち、すでに900校で導入されている。こういう事実があるんですね。どういうところで採用されてるかという、少し言い方が悪いんですけども偏差値で言えば、中位以下の高校が使ってて、それは悩みがありまして、バラバラなんです。生徒さんの悩みが、だからどっかであつまづいて、中学校のところであつまづいていけば、そこから教えなきゃいけないし、あるいは中には大学を狙っている生徒さんもいる。焦点が合わないんですね。そうするとこういうものがあれば、そういうものを見ながらやるという形で教えられる。ナガセが1991年から衛星放送やって、どんどん受けたという。SDGsで言うんですけど、質の高い教育をみんなに。世界中に子どもさんがいるわけですね、その人たちに、公平に共通の高い教育をやらうとしたらですね、ネットで見ると以外ないですよ。言い方悪いですけど、教え方が下手な先生もいるじゃないですか。質の高い教育を受けるんだと、それしなくて、スタディサプリ、これ応援してるわけじゃないですよ。人気の無い先生をどんどん変えているんですね。だから、僕はコーチングと、それから、スタディすることですね、ティーチング。ティーチングとコーチングを分けて、ティーチングの部分は、すべてもうこういう世界、アプリの世界でいいんじゃないかと。コーチングのところだけ、要するに個別に教えていくということがすごく大事で、これに対して先生の使う時間を、もっと集中していくべきなんじゃないか。どんどんこういうものを積極的に取り組む姿勢が大事なんじゃないかな。2020年にはもう、自動運転が始まる。そしたら運転手って職業が全部なくなっちゃう、極端なことを言ったら。ひょっとしたら、ティーチングの世界になったら、教師の先生方、仕事なくなっちゃうかもしれない。それぐらいの危機感を持って、どういうことをすべきかということを考えていかなきゃいけないんじゃないかと私は思います。以上です。

河野委員：SDGsという言葉とかいのちというキーワードで、県全体が同じ方向性を向いて、それぞれの事業に特化できるっていうことがすごくいいな、と思っておりまして、私は民間企業向けのコンサルタントなので、外資系の企業だと本国で決めて、いいか悪いかわからないけど、全世界一つになり、SDGsを基にした持続的経営とか、個人の成長というがあるので、それと、少し違うかもしれませんが、県全体で同じ方向を向いて、というのはいいなと思います。その上で、この中で、共生社会の話なんですけども、今日ずっと出ているこのインクルーシブ教育、私は、本当に手前みそなんですけど、神奈川県は誇れるものを持ってると、私はいろいろな地方に行くものですから思っています。ただこれを継続していくっていうことがこれから重要なんだろうなと思うんですけども、この中で、特に今、うまくいきつつあるクラスのありようを次に伝えていくのに先ほどから出ています、小学校中学校ですよ。幼い子ども達の中で、それを展開させるのに、先生が今非常に働き方改革で大変な中なんですけども、今、倉橋委員もおっしゃっていましたが、倉橋委員は技術の面でのサポートの事をおっしゃったので、私は人の方にとしようと思っていて、心を取り扱うところで、そこに先生に、力を特化してもらうために、サポート要員が必要なんじゃないかな、というのは、業務補助的なもの、授業のサポートを含めて必要なんじゃないかなと考えていました。少し違うテーマで、あと二つ言いたいんですけど、私の一つのライフワークみたいなものなんですけど、外国と繋がりがある人たちの課題というのが、仕事を含めて、その中にありまして、これも神奈川県の特徴だと思うんですよ。これは文化の共有っていう良い点もあれば、学習で非常に大変だっていう部分も大変多くて、そこで、この中でサポートする人たち、多文化教育コーディネーターの人たちは頑張ってくださいなんですけど、このあたりも、ある意味、ここで育てているその人達って、やはりこの後、神奈川に居たってことが基本になって、また日本との繋がりっていうのを考えると思うので、是非ここも、できれば手厚くお願いしたいと思います。最後に、施設訪問に神奈川県でたくさん行かせてもらってまして、教育委員も。特別支援学校へ行くと、やはり生の声が出てきて、先ほどから出てた話で、看護師さんの問題ですね、今日は細かい話まではできないんだと思うんですけども、これは今日ここでどうのっていうわけじゃないんですけど、すごく大きな問題だと思うんですね。簡単には解決策が出ないんだと思うんですが、学校のあり様とか、医療と教育のところがあると思うので、そういうことも大きなテーマと思いながら、共生社会を考えていかなきゃいけないと思います。最後の、社会に出るところが重要だっていうことは今回あまり触れる機会がなかったんですけど、私はなるべく多くの人たちが、少し言葉は適切じゃないかもしれないけど、納税者になれるような、できれば皆平等に教育を受けられるようにしたい。もちろん、それが難しい人たちにサポートができるような社会になるといいなと個人的には考えてます。以上です。

高橋委員：先ほど、河野委員もおっしゃいましたが、今日のテーマですね。共生社会の実現に向けたともに学ぶ教育環境づくり、こういう大事なテーマを議論できることを大変嬉しく思います。といいますのは、共生社会という考え方は、おそらく、もともとヨーロッパの北欧、福祉国家、人口が1億はない、5000万もない国々からはじまっている。ドイツもフランスも1億人いません。しかし1億人以上の人口を持つ日本やアメリカや

ロシア、中国では、なかなかこういうことを表立って言いづらいところがあります。つまり、経済力の活性化で生きてきたわけですね。それに対して、こういうテーマを日本で、しかも神奈川県で議論できるってことを、大変私はうれしく、幸せに思っているところでございます。持続可能な開発とか、循環型社会っていうのは、これはやはり、地球は一つの生命体だっていうこと。それからまた、これはSDGsにもありました、生物多様性ということですね。今、地球の温暖化や環境変化によっていろいろな種が減んでいるという現実があるわけです。それに対して、やはり多様性、ダイバーシティということを一つの大事な考え方の柱にしていきたいと思っています。これは、文化的な多様性、カルチュラルダイバーシティという意味でも、私はそう思っています。それからもう一つはですね、先ほど笠原委員からも出ましたけれども、子ども達にいろいろな知覚とか身体とか知的な障がいがあるわけです。私は自分も実は、視力が、眼鏡をかけて0.7なんですね。車の運転をそれで0.7以上でクリアしてるわけですけど、メガネという文明の利器によって私は障がいをカバーしてるわけです。100人いたら100の方がいろいろな文明の利器のお陰で、障がいをカバーしているわけで、自分は障がい者じゃないって言える人はいないのではないか、と思っています。いろいろな形で皆それを背負っているわけですね。そういう弱さ、人間の弱さの自覚が、私は知事のおっしゃるいのちの教育にも深くつながっていると思います。今日申し上げたいことは、共生の考え方です。どうしても、産業社会になりますと、共生を、お互いの強いところを出し合ってカバーし合うというですね、生物学で言うシンバイオシスという共生ですね。例えば、ヤドカリとイソギンチャクとかね。あるいは、鳥が木の実を食べて、足で花粉を運んで他へ移動するという、鳥と植物との関係とか。お互いにですね、強いところを使って、相手の弱いところをカバーし合うという、そういう共生が一つあるわけです。これも立派な共生であるとは思いますが。しかしもう一つ、先ほど知事が、映像で、県立住谷高等学校と県立中原養護学校の生徒さんたちが、いつの間にか一緒に踊っちゃってるじゃないのっていう話。あれは、いわゆるシンバイオシスというギブアンドテイクではなくて、あれはまさに響き合う共生であり、これは英語では、イヴァン・イリイチという人がコンヴィヴィアルと使っています。ジェンダーという言葉を広めた人ですね。確かめたんですけども、コンヴィヴィアルであるとは、もともとは祝祭空間、祝祭、あるいは人と一緒に飲み食いする喜びなんですね。これ感覚なんです、頭ではなくて。誰かと一緒にお酒を飲むと、誰かと一緒に食事するとおいしいよね。楽しいよねという感覚を人間みんな持っているんですね。私は、もともとはこれ、弱い生命体をお互いに自覚していた前近代社会、例えば、アングロサクソンが入っていく前のネイティブアメリカン、ラテンアメリカの人々が、こういうですね、コンヴィヴィアルな生き方をしていたってことを、イリイチは言っているわけです。私は決して文明を否定はしませんけど、そういう弱さの共生ですね。ネイティブインディアン達が持っていた、自然や人の弱さと響き合う、そういうものが、とっても大事だと思います、共生では。相利共生は、これは知性的レベルですけど、こういう響き合う共生というのは感受性レベルなんですね。知事が先ほど、県立住吉高等学校の生徒さんと、県立中原養護学校の生徒さんたちがいつの間にか一緒にダンスしてるんだよ、とおっしゃられた。あれは、知性レベルではなくて、感覚の響き合いをとっても知事が大事になさっているんだなと思いました。だんだんこういうものが、今、社会で消えてきました。イリイチはもともとイタリアで学んだ人で

す。カトリック世界の世界ですね、北欧へ行くとプロテスタント系が多いので、労働中心になるんですけど、スペインとかイタリアとか南フランスのような世界はフェスタとかフェスティバルとかですね、お互いに響き合って生きようねっていう文化がまだ残ってるんですね。私、やはりそういうような共生もしっかり視野に入れて、学校、子ども達を育成していきたい。先ほどどなたかが、子ども達の方が、障がい者と一緒に生きる感覚をみんな知ってるんだよね、大人の方が鈍いんだよねって言われました。それまでそういう子と一緒に生活しているから、そういう感覚がよく響いて伝わってくるんだという意味で、私はそういう二つの共生を大事にしながら、進めて参りたいと思います。

桐谷教育長：持続可能性というのをどう考えるか、といったときに、教育は、先生がいて、生徒がいて、教材があれば、その中で成り立つんですね。ただ、教材を揃える、先生を確保する、あるいは、どこで教えるか、そうした仕組みとか、システムがなければ、持続可能性っていうのは生まれないだろう。ただ教えるだけであれば、どこでも先生と生徒と教材があればいい。でも、先生を確保しなければいけない、教材を揃えなければいけない、教える場所を作らなきゃいけない、その環境を整えていくこと、仕組みを整えていくことが、持続可能性をつくり出すだろう。やはりこれはまさしく行政だろうと。そういった面で、引き続きインクルーシブ教育については、取り組んでいきたいと思っております。以上です。

黒岩知事：インクルーシブ教育に関わる取組みについては、皆さん前向きな形でとらえておられる。非常にありがたいことだと思います。今日はわざと県立住吉高等学校のダンス映像を皆さんに見ていただきました。私はあの話を聞いて、これはある種シンボリックな話だなと思ったんです。つまり、今、響き合う共生という話がありましたけど、まさにそういうことが一番大事なのかなって。頭で考えて、ここに生きなければいけないんだとか、あの子達のことを理解してあげなければいけないんだっていくら言っても、それは自分の体の中に入っていない。やはり、自然に何か楽しんじゃうっていう、その瞬間があったときに、何かその壁が一気に溶けていくという、これはすごく大事なものだなというふうに思いますね。だからそういう意味で、いわゆるエンターテイメントの持っている力っていうのは、非常に注目したいなと思ってるんですね。ダンスという一種エンターテイメント、それによって一つまさに祝祭空間って話がありましたけど、我々もそうですよね、だって、仲良しになっていったらね、カラオケで一緒に、歌って踊れるっていうだけで一気に仲良くなっちゃうみたいなことって普通にあります。そういったことを、もっとこのインクルーシブ教育っていう中でもですね、教育現場で、いろいろな形で実践していくっていうことが大事なことなんじゃないかなっていうふうに思いますよね。ただ、今、アンケート調査してもですね、いい答えばかり書いてきているということがあるので、それでいいってことになっているんだけど、我々がある種危機管理しなきゃいけないなと。それは教育現場で生身の人間達がいるわけですから、全くネガティブなことが突然起きることだってないわけじゃない。その時に、全てを否定されるような流れになるっていうことに対して、やはり我々はちゃんと理論的に構え、備えていかなきゃいけないということは思いますね。逆にそういう意味では、あまりに評判良すぎると怖いつつ思う

んですよね。やはり駄目じゃないか、あんな子らは、みたいのが出てきちゃったら、もう取り返しつかないということになりますから、その辺をしっかり意識しながらですね、乗り越えていくべきことは乗り越えていくというふうなことだと私は思いました。この新しいICTとか様々な技術、テクノロジーをどう生かすかということ視野に入れながらですね、そういった、せつかく芽が出始めたインクルーシブ教育といったものを本当にしっかり根付いていくような形、仕組みづくりですね、これはしっかりとまたこれからも、取り組んで行きたいなと思いました。今日は貴重なご意見ありがとうございました。では、事務局にお返しいたします。

議題2 その他

中谷政策部長：次回の会議は、秋頃を予定しております。具体的な日程、会場については、改めて調整させていただきますので、よろしく申し上げます。以上をもちまして、平成30年度第1回神奈川県総合教育会議を閉会いたします。

会議資料

- 資料1 かながわ教育大綱における主な取組みについて
- 資料2 共生社会の実現に向けたともに学ぶ教育環境づくり
- 参考資料1 これまでの県立高校におけるインクルーシブ教育の取組成果
- 参考資料2 かながわ教育大綱